

# フィールドワーク教育の方法と実践について

－長崎県のしまにおける15年の教育実践への考察－

山 田 千香子

はじめに

第1章 フィールドワーク教育とは

第1節 文化人類学とフィールドワーク

第2節 「地域学」とフィールドワーク

第2章 長崎県のしまにおける教育実践内容

第1節 フィールドワーク入門：「早岐茶市調査」－2年総合演習での実践内容

第2節 長崎県のしま（小値賀島）におけるフィールドワークの実践

第3章 15年の教育実践への考察

第4章 フィールドワーク教育に求められるもの

第1節 受講生のフィールド日記からの分析と考察

第2節 フィールドワークを通して学んだこと

おわりに－「教育としてのフィールドワーク」

はじめに

「フィールドワーク」という言葉は、一般的に「経験主義による現場における学習」と解される。学問的に文化人類学や社会学の一つの調査方法というだけでなく、調査法としてのフィールドワークの有効性が認められるにつれ、現在では広く人文・社会・自然の諸科学に及び、近接諸科学に

あっても、研究者や学生が学問的探究の精神を陶冶するうえで重要な位置づけを与えられてきた。とくに、フィールドでの経験は、学問を志す人々に「学問とは何か」という問いを投げかけ、教室では得ることのできない多様で濃密な知的経験を提供してきている<sup>(1)</sup>。

近年、フィールドワークという言葉はさまざまな分野において使用されているが、多くの場合、①数日間現地へ行って見学してくる、②役所や博物館に行って話を聞き資料をもらってくる、③会社や工場を見学してくる、④歴史学専攻等の場合、学生を「歴史的文化遺産ツアー」に連れて行く、等を称する例も多い。それは、これまで、ほとんどの学問分野では文献研究、デスクワークが「中心であること」あるいは「あったこと」に拠るものであり、そのため、現地に行くだけでもフィールドワークと称する例が生まれるほどであり、その多様性は拡大の傾向にある<sup>(2)</sup>。しかし、多くの人々がフィールドワークに参入することは、他方で調査する側とされる側の間でさまざまな困った問題を生じさせ、調査者としてのモラルの在り方が問われ、調査をされる側からは人権の問題として論じられるようにもなっている。誰もが最低限のマナーのみならず、調査される側の立場に立った倫理的な配慮が必要であり、それらを含めた相対的な視点が絶えず求められている。

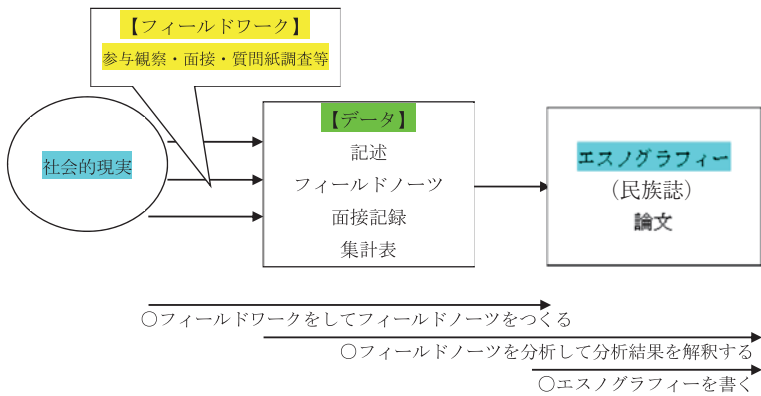
本論では文化人類学や社会学的視点に基づいたフィールドワークを指すものとし、その立場からのフィールドワーク教育の方法とその実践の内容について述べていく。具体的なフィールドワークの場所として、長崎県佐世保市早岐地区の「早岐茶市」調査の活動と、長崎県のしまののひとつである北松浦郡小値賀町での活動の実践を事例として紹介したい。

## 第1章 フィールドワーク教育とは

文化人類学は「人間とは何か」を問う学問であり、人間理解のための学問である。学問的手法として、世界の多様な諸民族の生活を研究対象とし

て、社会や文化とは何か、そして人間とは何かについて総合的に比較考察していくという、全体的アプローチを特色としている。その実践としてのフィールドワークから理論構築が為され、フィールドワークは理論構築の根拠を示すデータ収集の重要な位置を占めている。フィールドワーク教育とは、現地に出向き対象となるデータを収集し整理統合するというフィールドワークの経験や体験を通して、人間や文化や社会を理解するために、調査レポートや調査報告書、あるいは卒論という大型調査報告書を仕上げる一連の過程と定義しておきたい。次に箕浦の示す過程がそれらの内容と結びつくことから、図1としてフィールドワーク・プロセスを、フィールドワーク教育の一連の過程として紹介しておく。

図1. フィールドワーク・プロセス



出典：箕浦康子 『フィールドワークの技法と実際』 ミネルヴァ書房 1999年、p. 42

次に、文化人類学における「フィールドワークとは何か」について述べていきたい。

## 第1節 文化人類学とフィールドワーク

文化人類学は社会科学と位置付けられる。社会・文化・人々を研究対象とした場合には、「文献の限界」、「実験できないこと」の存在がある。人間を対象としての実験は倫理的問題につながるものであり、原則としてし

てはならないものである。実験科学における実験に代わるものが参与観察という方法であり、参与観察によって現地で収集したデータの蓄積が分析の対象であり、経験的データといえる民族誌（エスノグラフィー）は理論構築の根拠を示すものとなる。

フィールドワークは生活体験型調査、長期参与観察であり、現地の人々の生活の生の姿から、文化、社会、そして人々を全体的に理解していこうとする研究方法である。その社会や人々を内側から理解するためには、研究者が時間をかけて観察をし、時間をかけて現地の人々との対話を重ねていくことである。つまり、質的データを積み重ね、それに基づいて理論の構築・展開をしていくのである。文化人類学が社会科学と言われ、質的研究の源流に位置するといわれる所以はその点にある。

以上のように、研究の対象とする人々の中で生活を共にし、その経験を通して、対象を総体として理解する参与観察の方法は、文化人類学の中で育まれてきたフィールドワークの方法であり、今日、社会学をはじめ広く他の領域でも活用されている。しかし、参加（参与）と観察という行為は、本来、相互に緊張関係にあり、そのバランスをいかにとるかは、調査の成否に関わる重要な要素となる。つまり、対象となる現地の人々や社会の観察ばかりでなく、その社会に参加している自分を観察する視点も求められるのである。対象社会の内側からの理解を深めるために現地化すればするほど、いかに自分自身が客観的な視点を維持できるかが問われることとなる。

文化人類学は対象を「知る」ための基本的手法として二つの異なるアプローチを用いている。一つは全体的アプローチであり、広く大きく宇宙から地球を視るように「俯瞰的・鳥瞰的・体系的」に捉える視点であり、もうひとつは現場に出向き土地の襞々に入ってゆく「蟻の目的」なフィールドワークである。その二つの手法によって、得たデータを整理・分析し「対象像」を考察し記述・構築していく。そこからは、これまで視えなかったものが浮かび上がってくることが多い。

「既知の世界を見つめ直す」とは、「知っていると思いついていた当たり前前の世界を見つめ直す事」を意味する。今まで何気なく見ていた景色がそ

の歴史や背景、文化を知ることにより、今までと全く違ったものに見えてくるというのは、多くの人が持っている体験ではないだろうか。「見ているのに視えていない」とは、その対象を認識していても「そのものが有している意味や価値」に気づいていないことを指している。見ている人にとって「意味あるもの」になっていないのである。つまり「知る」ということは、その意味づけや価値を知ることである。「当たり前の世界観」からは何ら新しい意味や価値は見出せず、絶えず、見つめ直すこと、問い直すことが求められているのである。

最終的にフィールドワークとは「現地の人」を知る方法であり、「普通に生きている」、「生のかたち」に触れる方法である。それは「他者を知る方法」「他者理解の方法」であり、「人を受けいれる・人に受けいれてもらう方法と実践」と位置づけられる（原尻 2006：16）。また、表現を変えるならば（他者と出会うことに始まる）「文化人類学のフィールドワークとは、〈他者〉について少しでもわかろうとする実践である」（菅原 2006：3）とまとめることができるだろう。

## 第2節 「地域学」とフィールドワーク

次に、「地域学」とのかかわりの中で、フィールドワーク（現地研究・フィールド科学）の必要性を日本学術会議の地域学研究専門委員会が述べていることに注目し、紹介しておきたい。

2000年（平成12年）6月26日、「地域学の推進の必要性についての提言」が「太平洋学術研究連絡委員会地域学研究専門委員会報告」として日本学術会議太平洋学術研究連絡委員会地域学研究専門委員会より公表された<sup>③</sup>。そのなかで地域学をつぎのように定義している。ここで用いる地域学は、もっとも広義の「世界を文明に即して区分した諸地域にかかわる研究」を指すものとしたうえで、「現地研究（フィールド科学）に根ざして人文科学・社会科学・自然科学を統合的、俯瞰的に再編成しようとする学問的営為を、地域学と呼ぶこととする」。そのうえで地域学推進の意義について、「現在わが国において、地域研究を含む地域学を総体として強化し推進す

ることは、以下に述べるように、学術をその基礎から再構築するという意味において急務だと言わなければならない。」と述べ、地域学推進を次のように意義付けている。「既成の学術専門分野（ディシプリン）の多くは、ヨーロッパにおいて、数世紀にわたって、アジアなどとの比較の視点をもった博物学（ナチュラル・ヒストリー）という事実上の地域学を基盤として形成されてきたものである。それゆえ、欧米の学術にあっては基礎研究としての意味をもつ地域学を研究してこなかったのではなく、その土台の上に現在の学問体系が存在しているのである。他方、現在のわが国においては、つぎの二つの点から現地研究に根ざした基礎研究としての地域学の展開が必要とされている。」と。ここでは、上記のうち以下の一点について引用する<sup>(4)</sup>。

わが国は明治以来、世界諸地域を相手どってそのおのおのを総合的にとらえようとする基礎研究としての地域学構築の地道な努力を十分にしないまま、いわば学理・学説としてのディシプリンだけを欧米から輸入してきた。そのために、わが国の学術専門分野は、とかく欧米の理論を追いかけるものとなってしまった面があることは否定できない。あらためて今日、もっとも基礎的な現地研究に立ち戻り、現地研究に立脚した学問を創り出す努力が必要になってきている。現地研究という「地を這う」ような地道な作業を経ないかぎり、しっかりした骨格をそなえる学問体系の構築は望めない。

学術会議で指摘している重要な点は、「従来の専門分化した学問的手法のみでは、現在、目前に危機的に発生している問題に対処し、それを解決することがむずかしくなっていること」であり、「知識の統合を要求するとともに、これを具体的な場所に根ざした地域学として実現することを必須のものとしている」という点にある。それは、従来のディシプリンの枠を超え、新しい視点をそなえた、より高い統合的なレベルでの俯瞰的研究

の必要がたつよく自覚されてきたのである（山田・吉居 2010：193）。

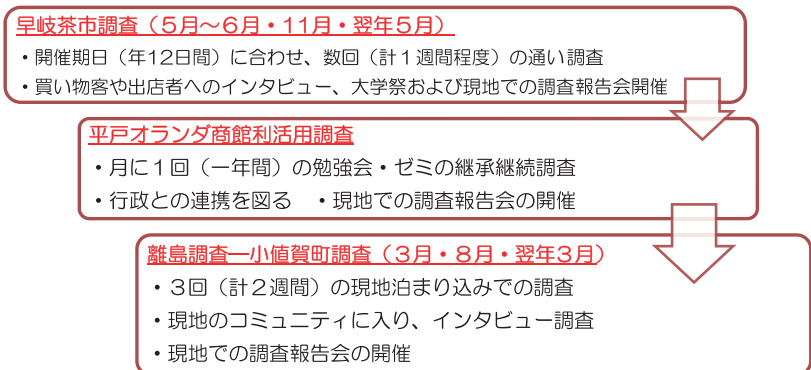
日本学術会議での議論や報告書の内容を踏まえると、「現地研究に根ざした基礎研究としての地域学の展開」が必要とされており、具体的な場所に根ざしたフィールド科学としての地域学が求められていること、地域学とフィールドワークには密接な関係にあることを、ここでは確認しておきたい。

## 第2章 長崎県のしまにおける教育実践内容

ここで紹介する「早岐茶市調査」および、長崎県の離島調査は、学部 の 2 年次、3 年次の「総合演習」「専門演習」を中心としている。学生はこのフィールド体験を経て、2 年次・3 年次での調査報告書の執筆から、4 年次での「卒論」へと発展的に思考を深め仕上げることを教育プログラムとしている。調査演習の前段階として、文化人類学、地域研究（離島）、社会調査法Ⅰ・Ⅱ、文化政策論、西海学Ⅰ・Ⅱ等の科目履修を学生に求め、専門演習での活動に必要な知識の獲得とものの考え方の訓練としている。

2 年生から 3 年生へ、そして 4 年生の活動全体を図示化したものが次のとおりである。

図 2. 山田ゼミ 3 年間のフィールドワーク実践一覧



既にお気づきだと思うが、上記の「授業」としての活動内容は所定のカリキュラムや授業時間の枠内ではこなせないものである。授業時間外の「宿題」が多く、少人数のグループ活動であっても、ゼミ全体のまとまりが必要とされ、時間外の活動の調整や実践が求められる。ほとんどが授業時間外の「宿題」に長い時間が費やされる。そのため、これらの学外活動は制度上の手続きを経て、単位認定化されている。参考までに2週間の泊まり

表1. <フィールドワーク連の過程>

- 1) 先行研究調べ-調査テーマ(仮説)についての検討
- 2) 事前調査(現地についての情報収集)
- 3) →本調査
- 4) →事後調査(補足調査)
- 5) →データ等、まとめる作業
- 6) →調査報告書・論文作成
- 7) →報告・発表

地図1. 小値賀町・平戸市・早岐





込みの離島調査で2単位、月一回（15回）の勉強会および学外活動で1単位の認定となっている。こうした一連のフィールドワークに、多くの学生が生き生きとした好奇心のもとに挑戦してきた。次にその具体的内容について紹介していきたい。

## 第1節 フィールドワーク入門：「早岐茶市調査」－2年総合演習での実践内容

2年生のフィールドワークは、全体の中で「フィールドワーク入門」（第一回のフィールドワーク実践）として位置付け、「早岐茶市」を主題として、演習全体のテーマと個人テーマによる調査を実施している。10年が経過したところである。授業の基本的な内容は以下のとおりである。

### ＜総合演習 シラバス内容＞

まず、フィールドワークの第一歩として「早岐茶市」について調査する。少子高齢化する地域社会で、四百余年の歴史を現代に引き継ぐ「早岐茶市」は今でも活気に溢れている。早岐の長年の年中行事である「茶市」を舞台に、歴史やふれあいを大切にしながら、地域住民にサービスする早岐商店街の取り組みを観る。小さな路地に入り込んだり、店頭を観察したり、足で歩いて、じっくりと話を聞いて、人々の生活の知恵や工夫の奥深さに触れるフィールドワークは「人が生きるということ」を考えるチャンスを与えてくれる。学生のユニークな視点からの発見や出会いが、文化や歴史を読み解き、社会を変える手がかりになることを実感できるはずである。5月～6月は「茶市」をテーマとしてグループごとの調査実習、発表を実施し、報告の形へまとめる作業をしていく。早岐茶市へ出向く前に『ボランティア－もうひとつの情報社会』を読み、「市」の機能を考える。年間を通して『タテ社会の人間関係』『くじらの文化人類学』を読んでいく。

また、ゼミとして佐世保市からの受託研究調査や平戸市との連携研究調査によるフィールドワーク、勉強会等の地域貢献活動も上記以外に実施している。

## 1. 早岐茶市調査に関する演習内容

まず、最初に、「早岐茶市」という課題を選択した理由について述べておきたい。佐世保市早岐地区で開催される早岐茶市の歴史は400年から450年以上と言われている<sup>5)</sup>。昔から海陸ともに交通の要衝であり、水陸交通の十字路に当たっていた早岐で、山に住んでいた猟師や山伏達が獲った鳥や獣の皮等と、海辺に住む漁師が獲った魚や海草等とを交換していたことが茶市のはじまりとされる。その後、田植え前の農閑期である初夏の時期に縁起のいい「八」のつく日を中心として市が誕生し、「新茶」を中心として、海のもの、山のものの物々交換が出发点と考えられている。新茶の季節に開催される一年で12日間限定の定期市である。

経済学部地域政策学科に学ぶ学生にとって、「物々交換」は経済学の原点であり、フィールドワーク実践の良好なテーマとなる。そればかりでなく、定期市は経済という視点のみならず、「人が集まる」「情報が集まる」格好の場所であり、多くの人間模様が観察できる場所なのである。フィールドワークの進め方は、以下の通りである。

### 1) 準備学習：「市」とは何か

早岐茶市の物々交換について－「交換経済」の理論枠組みについて  
金子郁容『ボランティアもう一つの情報社会』岩波新書の輪読－  
「市」に集中する情報とネットワークの在り方への気づきと学び

### 2) 早岐茶市（5月～6月：初市・中市・後市・梅市）をテーマとして、グループごとの調査・個人別調査の実施。

調査期間：12日間の中から6日間程度・日帰り実習

### 3) 報告書としてまとめる作業

### 4) 大学祭でのポスター発表

### 5) 現地での調査報告会の開催（学生の報告会については、これまでに佐世保ケーブルTVの特別番組として二回特集が生まれ、各年に一週間の継続放送がされた）



<写真1. 早岐茶市風景 2007年>

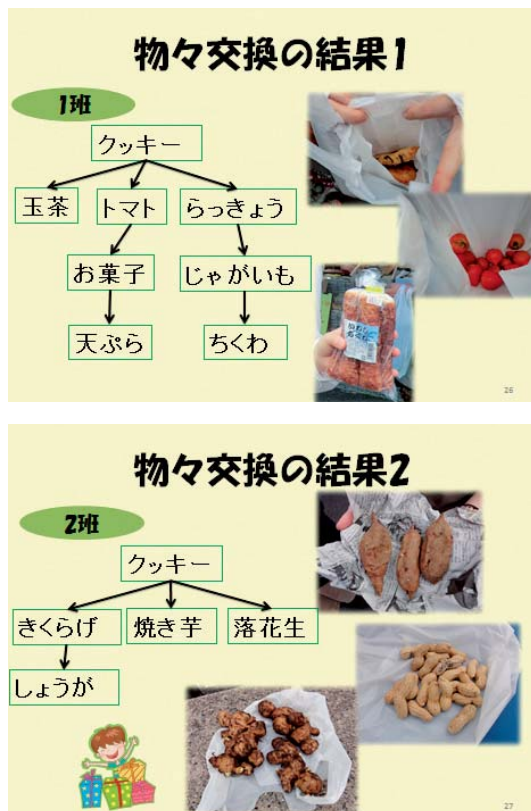
## 2. 早岐茶市における学生の「物々交換」への挑戦

早岐茶市のはじまりは、山の幸と海の幸を直接交換し始めたことが「物々交換」の出発点だと語られるが、その物々交換は大きく分けて3つの場面が挙げられる。客と客、店と客、店と店との直接的な物の交換取引のことで、つい最近（過去15年前）まで早岐茶市では多く行われていた。また、店と客との物々交換は早岐茶市の特徴である対面販売を大いに活かしており、売り手と買い手の会話の中で物々交換が成り立っていく。ところが、現在では物々交換の実施は大幅に減少し、確認されたのは一件の事例のみであった。その理由としては、物々交換が盛んだった時代を経験した出店者が減少していること、若い出店者が増加し「商売」が主となり、利益を目標とし物々交換から離れていく傾向があること、が挙げられる。そこで、学生による発案で、物々交換がどこまで可能なのかについて、5年前から学生からの物々交換を試みてきた。今回学生が実践した方法は、店と客との物々交換である。

学生でクッキーを作り、材料費等を考慮した上で価値を100円程度と設定し、交換の際にはその旨を交換相手に伝え、クッキーが何に変わるかを調査の目的として実施した。学生にとって、貨幣経済が当たりまえとなった現代社会において、本当に物々交換ができるとは思えず、はじめは本当

に交換してもらえるのが不安であったようだが、実際に交換が成功した時は、交換相手との「つながり」を感じることができたという。物々交換をするうえで、物の価値の相場は厳密な等価交換までは考慮されず、双方において相手を思いやる気持ちが物々交換を可能にしているということを改めて実感したという。店の方の反応は、物々交換に対して積極的であり、こちらから交換を依頼したにもかかわらず、逆に、感謝され、早岐茶市には貨幣とのやりとりでは存在し得ない「つながり」があるということを体感したようである<sup>6)</sup>。

図3. 「私たちの物々交換」の結果 (一部)



物々交換の結果は図3のとおりである。学生の申し出に、好意的で一緒に楽しんでくれる店舗が多かったことは、学生にとって何よりの励ましになった。

図4. 調査用シート

早岐茶市全体調査シート

調査日：2013年 月 日 曜日

天候：★☆☆☆ その概( ) 性別：男性 女性

時間： 分 秒 年齢： 歳未満

1. お店の名前
2. 出品物
 

常備品等、特別をどうするか？  
 お店の特徴をどのようにするか？(種別やお茶そのものの品種等)
3. 出店年数
 

年
4. 出店人数
 

参加員以外で大体どのくらいか？
5. どこから来たのか？
 

近所の人で出店しているか？
6. 出店経路
 

市内 ⇄ 県外 ( )  
 ⇄ 隣県 ( )
7. 来店回数を調査
 

金曜日 ⇄ 平日 ⇄ 祭日 ⇄ 梅雨 (もし理由もあれば記入のこと。)  
 市内 ⇄ 県外 ( ) ⇄ 隣県 ⇄ 他県 ⇄ 海外 ⇄

※記入例

早岐茶市一斉調査において使用



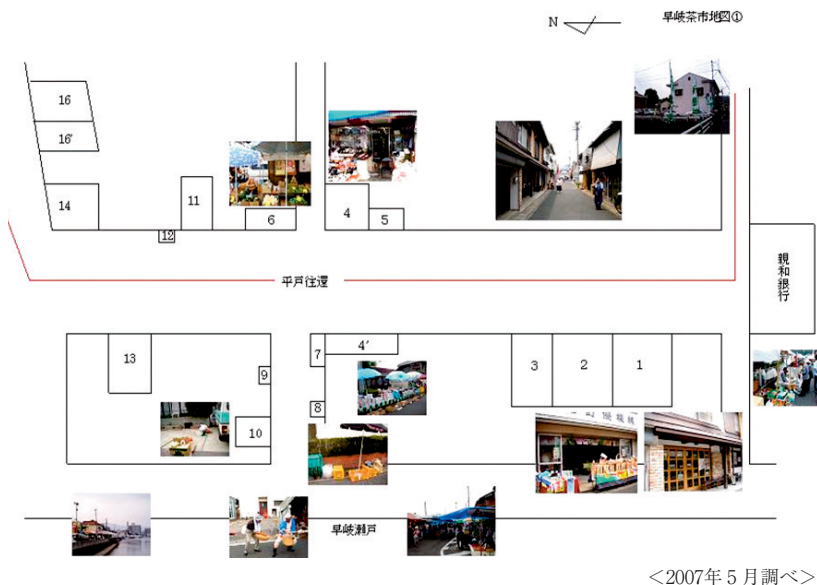



表2. 2013年度の2年総合演習「早岐茶市調査テーマ」一覧

・早岐茶市の継承・戦後を中心に一平戸延命茶市との比較から一
・早岐茶市と愛野の市一存続する市と消えた市、その背景一
・上五島からの早岐茶市出店者が減少した理由とその背景
・水産業から見る早岐茶市一早岐茶市の希少性一
・商品に込められた出店者の思い一松尾製茶店を中心として一
・早岐茶市から見る購買心理
・お茶菓子から見る早岐茶市の魅力
・早岐茶市のもうひとつの魅力一買い物をする事、人とふれあうこと一
・早岐茶市の『おまけ』
・早岐茶市の魅力一子どもの視点から一
・早岐茶市の継承のかたち
・百姓として生きる一早岐茶市と日本の農業一
・私たちの物々交換

図5. 早岐茶市出店舗調ベマップ (一部)



## 第2節 長崎県のしま (小値賀島) におけるフィールドワークの実践

まず、はじめに、小値賀というフィールド選択の理由を述べておきたい。毎年小値賀をフィールドワークの地として選択している理由は、主に二つある。一つ目は、本学がある佐世保市から比較的近い島であり、活動しやすい広さであること。役場の方々を始め学生の受け入れ態勢が整っており、何より小値賀に関する専門家 (学芸員) が島に存在している点である。そして二つ目は、小値賀は伝統的文化特質が今もなお残されている地域で、多種多様なテーマ設定が可能という点である。文化人類学的視点から見て調査テーマの宝庫であり、多様な調査可能性環境が整っている。調査の5年目からは、報告会等が小値賀町の年間行事に組み入れられ、町の全面的な協力体制のもとでの実践がされてきた。

表3. 出店舗についての聞き取り内容（番号はマップと対応）

店名	品物	どこ	いつから	市	秘訣	問題	備考
1 早岐街づくり協議会事務所	うどん、そうめん	地元	4年半前	初中後梅		人通りが少ない	
2 お茶羽田園	お茶		7年前	初中後梅	はがき	開催日	趣味
3 藤津屋旅館（閉）							駅前に移動
4 つよしや	下駄→靴	地元	大正14年	初中後梅		後継ぎ	
5 ミシン	ミシン 糸など	地元	20年前	12回			
6 本多青果	青果	地元	20年前	初中後梅	安さ 常連		交流として発展してほしい
7 特になし	金魚	熊本 (佐竹)	30年前				昔はテントがあったけど今はない 業商 スーパーにないものが見える
8 特になし	紅花茶	柳川					
9 ケーラン	けいらん						
10 水川商店	野菜、果物、花	日宇	20年以上前	初中後梅		トイレ	発展と交流
11 特になし（フリマ）	リサイクル品	地元	4年半	初中後梅			友達と交互に 駐車場 市のバックアップ
12 特になし	豆腐						
13 Music Office どころちえ	琴	佐世保	3年前	12回		ステージ	演奏させてもらってありがたい 商工会から声がかかった
14 特になし	竹細工						道楽 趣味
15 本原金物店	鋸、鎌、鋏等	地元					店は80年前から
16 前田蒲鉾店	蒲鉾など	早岐	5年前	初中後梅		駐車場	
16 前田蒲鉾店	蒲鉾 てんぷら	早岐	60年前	初中後梅	リピーター	駐車場 開催日	観光 市より商工会に頑張してほしい
17 特になし	着物						
18 やまさき	着物						
19 椎葉商店	帽子	地元	昭和30年頃	初中後梅			普段は食料品、荒物、神仏具、 店自体は70年前から
20 やきとり	やきとり	早岐	初			イベント	趣味（声かけ）
21 特になし	衣類						店は40年前から
22 みぞかみ薬局	薬品	地元	昭和3年	梅		後継ぎ	茶市が発展していくことについて …いまさら無理

<2007年5月調べ>

2年生の3月に予備調査として2泊3日、3年生の夏（8月の旧盆を挟んだ日程）に本調査として7泊8日、五島列島北端に位置する小値賀町に滞在しフィールドワーク体験をする。島での生活はその期間のみではなく、個人的な差は生じるがテーマ取り組みの必要性に応じて多くの学生が何度も島を往復する場合もある。ゼミ全体のテーマとして「島の暮らし：伝統と豊かさ」を設定し、さらにその枠内で各自が自分自身のテーマを見出し、

それをフィールドで検証しながら問題発見へつなげ課題解決に取り組む方法をとっている。

最初に「フィールドワークとは何か」について学問的に理解することを目標としている。2011年からは波平恵美子著『質的研究の方法』をテキストとして使用し、4月～7月の演習時に丁寧に読み解き、現地へも携行することとしている。同時に、各人がフィールドを対象とした具体的な論文テーマ構想・計画・発表および、参考文献リスト作成を行う。

#### ＜専門演習 シラバス内容＞

目的：「島の暮らし：伝統と豊かさ」を全体的テーマとする。外洋一島一町の北松浦郡小値賀町において島の伝統や暮らしに触れ、島であるが故の町が抱えている問題点や課題について、また、学生からみた「地域資源」掘り起こしについて、各自の問題意識のもとに課題設定し調査に取り組む。1年間かけてフィールドワークの技法を着実に身につけ、フィールドで学び、考えることのおもしろさ、むずかしさを経験する。フィールドワークの具体的な方法について学ぶ。他者とのコミュニケーションの実践の過程で交渉力等を身につける。

◎2年春休み（※第二回めのフィールドワークの実践）

2泊3日・離島本調査の事前調査（北松浦郡小値賀町）

◎3年専門演習

○前期の課題：「フィールドワークとは何か」

専門書を読み理論的・学問的に理解する。

各自の調査課題（テーマ）決め・先行研究調査

◎夏休み：7泊8日の日程でフィールドワーク「離島調査」を実施。

本調査（※第三回めのフィールドワークの実践）

○後期の課題：本調査後の報告、報告についての議論を通して、テーマを明確にしながら論文をまとめる作業を遂行していく。デスクとフィールドとの往復で考えていく過程。調査成果として翌年3月に『ゼミ論文集』発行

（課題に添って一人12000字～15000字の論文作成）

◎離島調査報告会（※第四回めのフィールドワークの実践）



図 6. フィールドワークの方法とその実践課程



図 7. フィールドワークの事前準備

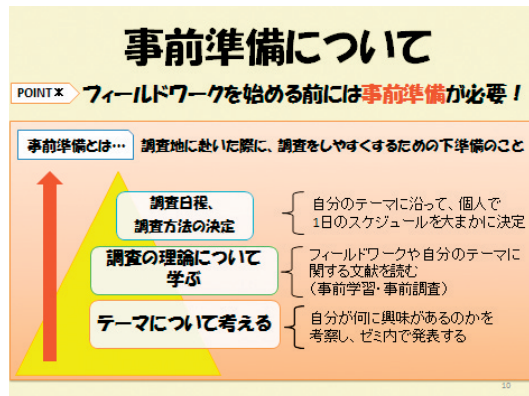


図8. 小値賀でのフィールドワークの流れ

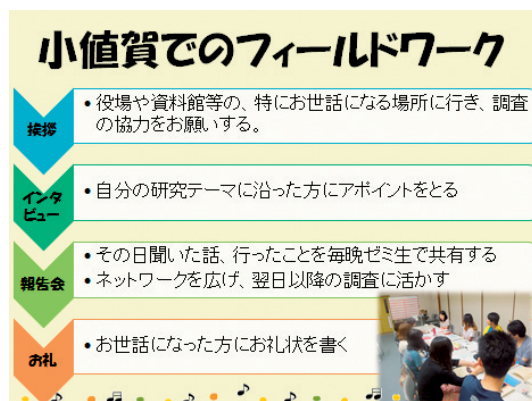


表4. 2011～13年度の3年生「小値賀調査テーマ」一覧（抜粋）

・ 杜氏集団の輩出構造－長崎県小値賀杜氏を事例として
・ 屋号が語るもの－長崎県小値賀町に残る屋号分析－
・ 西海の海人文化－西海海人の歴史から見える長崎県対馬と小値賀のつながり－
・ テクノロジーの進展がもたらした漁業知識の変遷とその影響
－長崎県小値賀町における漁師の世界観－
・ 離島から見る現代日本における出産と産科医療の現状と課題
－北松浦郡小値賀町を事例として－
・ 講からみる地域社会のつながり－長崎県小値賀町を事例として－
・ 秋祭りにみるもてなしの文化－長崎県小値賀町の秋祭り後座の役割－
・ 海外交易史における西海の流通と往来－小値賀の交易と海路の歴史－
・ 地域づくりにおける移住者の持つ力－長崎県小値賀町を事例として－
・ 社会における自力更生とは－長崎県小値賀町大島郷を事例として－

### 第3章 15年の教育実践への考察

振り返ってみると長崎県立大学に着任したのが1999年4月。ゼミ論文集発行は着任当初から学生の学習成果発表の場として位置づけ、課題にアプ

ローチするフィールドワーク調査のおもしろさを体験するだけではなく、成果としてのレポート作成と原稿の内容を質的に高めることを目標としてきた。さらに調査成果の社会還元として、報告書を作成し地元に戻元する（加えて報告会を開く）ということを実原則として守ってきた。

学生たちにとっては地元に入り地元の方々へのインタビューや、やりとりを通して人間関係を構築していく過程、地元行政から統計資料等を得るといったフィールドワークの実践の一部については楽しいことが多く意気盛んとなるが、人類学において本質的な要素はフィールドワークの後のエスノグラフィー（民族誌）（ここでは調査報告書）を書くことである。調査資料全体をまとめて、ひとつのストーリーある文章に構成していくという一連の作業は集中力と根気が求められ、とくに眼前に見えていることがらの見えない背景との関係を探り、事実を脈絡化できる力を持つ、というところにフィールドワーク教育の核心が存在する。

一般的な講義レポートと異なり、教員以外の読者、それも地元の人々を明確に意識して書かねばならないという緊張感が伴う。この段階になるとどうしても書けずに挫折する学生も現われる。それでも愚直にも何とかこれまで続けてきたのは、学生たちが十分に整理・分析はできなくても、まず「地元の記録を残す」という作業に重要性があると考えていることと、



<写真2. ゼミ論文集（調査報告書）の刊行>

報告書によって地元へ還元することや報告会を開くことで、調査内容の確認、データに基づく分析への批判への回答となること。調査地の方々との関係がさらに深まり、新たな関係を築くことができること。その継続性が大学と地域の信頼関係の構築と本質的な意味での地域連携へつながるとの考えからである。

## 第4章 フィールドワーク教育に求められるもの

本章ではフィールドワークを通しての学生の変化に注目していきたいと思う。ここでは、受講生のフィールド日記からの分析と考察を加えてフィールドワーク教育の成果とは何かについて考えていく。フィールドノートの重要性については、前もって講義をし、毎日、その日のうち記録を取ることを課している。フィールドノートは、人類学においては重要なものであり、科学の実験ノートと同様の位置づけとなる。フィールド日記は、フィールドノートとはまた別であり、自分のテーマにどのようにアプローチをしていったかの「振り返り」の記録である。

### 第1節 受講生のフィールド日記からの分析と考察

ここでの紹介では、下線部（筆者追記）に注目したい。学生自身が大きな変化と気づきを、そして成長の一端を見せている箇所である。一般的に学生はフィールドにおいて、自分自身の当該地への先入観念や偏見への気づき→振り返り→確認（データの収集・インタビューの試み・参与観察）をし、その社会や人々の建前と実際、本音が一致しないこと、語り手一人ひとりの「話が違う」ことにとまどいを感じているが、そこから、どのように向き合い、昇華していくかについて注目したい。

1. 【3年生の8月 ※第三回目のフィールドワークの実践】

<学生Aのフィールド日記より。 2007年8月の記録>

★8月9日★

いよいよ、この日が来た。先輩や先生からの話と自分の事前調査や先行研究の学びの中で、小値賀でのこの1週間のフィールドワークに対して気を抜けない思い、覚悟をしてのぞんだ私にとって、「初日」は大切な意味があった。この1週間がどう転ぶか。それはスタートにかかると思ったからだ。

実際にそのスタートを切ってみて、まだ初日は本格的な動きはなかったものの、周りの様子を気にしている自分がいることに気がついた。「みんな、がんばってるな〜」自分の持ってきたテーマ「観光(旅テーマ提供業)」をどれだけ深められるか、小値賀を生かすための観光とはどんなものか。たくさんの疑問と、たくさんの不安を抱いて乗り込んできたが、その波にのまれちゃいけない。みんな、やってる。みんなが一緒に動き出そうとしている中、自分もがんばろうと思った。そして、今回の目標を「出会い」に定め、たくさんの出会いを臆することなく求めて行こうと決めた。出会いの中で、たくさんの考えを知り、自分の幅を広げること。それもフィールドワークの醍醐味だと、私は思っている。さあ、どんな1週間が始まるのかな？

★8月10日★

今日は、ノックアウトだった。一緒に回ったA君も呆然としていた。というのも、運営側でも意見が異なっていたから。そりゃそうだ。人間100人いれば100人の考えがある。だけど、自分の中に、運営側の考えの統一性を決め付けていた固定観念があったことは「甘い」といわざるをえない。

今日出会った人は3人。1人は民泊部会長の「Kさん」。そして、アイランドツーリズム協会の「Aさん」、「Nさん」だ。A君が民泊がテーマだっ

たこともあり、民泊という切り口で調査は始まったが、観光の中心に民泊があることは、3人の話を聞くうちに理解できた。

それにしても、年齢、立場から意見はことなるもんだと思った。特にアイルランドツーリズム協会のNさん、Aさん、のお二人について。

NさんはIターンの方だが、外の流れ、観光体系のめまぐるしい変化、またそれを含む社会の変化を知っている。だからこそ、小値賀の社会のスピードをいいところでもあり、不足する面があると指摘していた。一方、Aさんは、それほど経済的成長を求めるのではなく、今ある、ゆとりある暮らしがあとほんの少しよくなれば・・・という考えだ。現状にそれほど不満をもっていないのか、高齢化問題も、「全国的な流れなんだから」と切り捨てた。

・・・どうしよう。

意外と、地元の人って現状に満足しているのか？あまりガツガツした感じではなかった。拍子抜けというか、あまり、それほど発展をのぞんでないような感じだった。

・・・す、進まない・・・

地元の人がそう、望んでいるなら、外部の私たちがつべこべ言えるのか？

IターンのNさんはいろいろと観光を通じた小値賀の活性化を望んで活動されているようだが、「外の人間だからこそ」の事ではないだろうか。本当に失礼かもしれないが、私の中で外と内の感覚が出てしまった。外の人間が小値賀をかき回してるだけになったらどうしよう。自分の小値賀での役割、位置づけがわからなくなった。

★8月12日★

それにしても、話を聞いて理解するということは体力がいる。真剣になればなるほど、いろんな立場の人と出会えば会うほど、その関係も気になって、複雑になってしまった。何がよくて何が悪いのか。小値賀の人たちに必要なものはなんなのか。「観光」が本当に必要なものなのか。意味があること？このテーマでよかったのか？外から来た私たちが提言を許されるのか？そんな疑問が「頭の中」をごちゃごちゃにした。私はわからなくなった。

バーベキューの時Tさんから、私たちが「結論」を出すのは無理。スパッとこれがいいと結論をだそうとするのではなく、考えて、考えて、悩んで見てきたことを提言する。これが私たちのゴールだと、アドバイスをいただいた。これでいいんだ。

Tさんから小値賀から私たちは方法論を学んでいるとも指摘を受けたが、その通り、私たちが何かをえらそうに示すのではなく、その「提言」までの過程をあれこれ悩みながら進んでいく。その過程こそが小値賀に方法論を学ばせてもらっていることに他ならない。小値賀の恩恵に与らせていただいているということだ。

それだけは事実であり、忘れないでいたいと思う。

★8月13日★

ひたすらノートまとめ。そして、休養の日。

★8月14日★

小値賀でのフィールドワーク事実上の最終日。

今日は朝から民泊部会の近藤さんの話を聞きに行った。といってもものA君の付き添いだ。今回は近藤さんのライフヒストリーに注目して、Uターン者となったきっかけを聞いた。そこには、島への愛着と家族としての決

断の中での葛藤があった。戻りたい。でも、家族の意思が。これらの思いは近藤さんだけに限らないだろう。島を出た小値賀人に共通していえることかもしれない。そして、小値賀の外で生まれた小値賀二世については、「小値賀には来ない」と近藤さんは話していた。小さい頃を(小値賀で)過ごしていない子どもたちにとってそれは難しいと・・・。親として離れて暮らすことに寂しさもあるだろうが、それも含めて小値賀での暮らしを判断した近藤さんを支えるものは、小値賀への愛着だと思う。  
地元への愛、私にもそれだけのものがあるのだろうか。

## 2. 【3年生の3月 調査報告会

### ※第四回めのフィールドワークの実践：総括】

フィールドワークにおける最終段階である。調査報告書としてのゼミ論文集を執筆し、刊行を達成し、論文集を携えての地元での成果発表・報告会の記録である。半年前の夏に構築した地元の人々との再会では、今回「娘として迎えられた」感激や、報告書や自分の手紙を大事にとっておいてくれている島の人々の温かさに触れた感激が伝わってくる。フィールドワークで重要なラポール(信頼関係)の形成が十分に果たしている。それらに対する感謝の気持ちとともに、調査報告会に向き合う学生の真剣さが表現されている。

何よりも最終的な段階である、調査報告会での報告への地元の人々の反応・評価や、2年間という長期にわたるフィールドワーク継続をやり遂げた達成感に注目したい。

<学生Bのフィールド日記より。2010年8月>

フィールド日記 ～IN 小値賀～

### ★3月24日(木)★

10:30 出港 13:55 小値賀着 15:30 若者交流センター着



→ 挨拶回り（役場、田中さん宅） 18：00 夕食 お風呂 21：00  
リハーサル

台風なし！快晴！海は穏やか！こんなに天気と条件に恵まれた小値賀フィールドワークは初めてである。去年の今頃は風で海は大荒れの船出。夏はお盆と重なって満席のため、予定の船に乗ることはできなかった。今度の嵐（？）はいつくるのだろうか・・・

小値賀に着き、挨拶周りをしていて、役場の方や田中さん、住民の方が「楽しみにしているよ！がんばってね！行くからね！」と声をかけていただき、「きちんと報告しなくちゃ」と責任感を感じた。リハーサルも無事に終わり、一日目はみんな疲れてすぐに寝た。

2年生と初めての小値賀フィールドワーク。2年生の作るご飯はとっても美味しく、なんといっても準備の良さと手際の良さが印象的だった。一人ひとりがやることをきちんとやっていて、チームワークの良さにびっくりした。

明日は、小値賀調査報告会！！今まで調査してきたことを、きちんと報告しよう！精一杯に伝えよう！あ~~~~~ドキドキする~~~~

★3月25日（金）★

6：30 起床 7：00朝食（バイキング） 9：00 リハーサル  
12：00 昼食（お好み焼き） 15：30 リハーサル開始  
17：30 晩御飯（カレー）  
19：00 報告会本番 ～21：30 → お風呂 反省会 飲み会

小値賀2日目。この日は報告会の緊張と不安で、みんな顔が固まっていた。朝食は、な、なんとおおおお！！バイキングIN小値賀だった。朝は食べられない人もいるし、人それぞれ食べる量も違うのでバイキングにしてくれた。優しいな。ありがとう！！

朝のリハーサルも無事に終わった。長尾がなっちゃんのアニメーションに苦戦していて発狂しそうだった。(笑) お昼は関西風お好み焼き! 3年生と先生はフィールドワークをしていたので、若交にいるメンバーで食べた。でっかいお好み焼きが2枚とおにぎりがありお腹いっぱい!! イカが沢山入っていておいしかった~。何より、かずさがお腹いっぱいである姿を見られたことが嬉しかった。(笑)

昼食を食べて、福祉協議会に行きリハーサル開始!! 部屋が暑くて咽がカラカラになって声がハスキーに!何回もリハーサルをしても緊張するなあ~。みんなの声や表情からも緊張していることが伝わった。2年生がカレーを作って持ってきてくれてみんなで晩御飯を食べた。いよいよ!!! 報告会の始まり~!!!

報告会では、小値賀町のみなさんが真剣に私たちの報告を聞いてくださっているのが、発表をしている最中にもひしひしと伝わってきた。ゼミ生もみんなリハーサルの時よりも、本番の方が落ち着いてはきはきとしていて、心から伝えようという気持ちが分かった。報告会をして、「調査報告をすることの責任」の意味がわかったような気がした。私が招待した方も来てくださって、「よかったよ。」「これからがんばってね」と声をかけていただいたことが何よりも嬉しかった。これから、卒業論文に向けて頑張っていこうというやる気が今まで以上に溢れてきた。

報告会が終わり、みんなでお風呂に入った後に反省会をした。一人一人の報告会に対する熱い気持ちが伝わってきた。リハーサルや準備の時、みんな協力しあって取り組んできたことが懐かしくも思えた。今はただ、報告会が終わったという安心感でいっぱいだった。

★ 3月26日 (土) ★

7:30 起床 8:00 朝食 → 挨拶回り 12:00 昼食

(お弁当と残り物)

14:05 小値賀港発→佐世保着16:40 →解散

最終日はライフヒストリーでお世話になった田中さんのお宅に、報告会に来て下さったお礼であいさつにいった。田中さんのお宅にいき、田中さんが奥さんに「おーい！娘のきたぞ～」と言ったのを聞いてすごく嬉しかった。帰りにあおさまで頂いて、感謝の気持ちでいっぱいだ。本当にありがとうございました。

小値賀を出発するとき、なんだかさびしい気持ちになった。一年前に初めて小値賀に来てから、夏のフィールドワーク、レポート、リハーサル、小値賀調査報告会とあつという間に過ぎていった。先輩に、「忙しいよ。大変よ。」と聞いていたので初めのころはびびっていた。でも、小値賀に行けばいくほど小値賀が好きになり、調査の中で心温かい方々と沢山出会い、色々な話を聞くことで学び、知り、そして、自分の視野も価値観も広がっていった。私は、小値賀調査が「忙しい。大変」というより、「楽しかった。」という気持ちでいっぱいだった。そして、また、みんなで「小値賀に行きたい！野崎島に行きたい！」と強く思った。

あと一年間の学生生活、後輩とのゼミ、目の前にある課題に常に全力でぶつかっていこうと思う。最後に、小値賀調査の際に御協力頂いた小値賀町民の皆さま、本当にありがとうございました。ご指導くださった山田先生ありがとうございます。いつも支えてくれたゼミのみんな、支えてくれた2年生、本当にありがとう！

<学生Cのフィールド日記>

フィールド日記（2011年 3月24日～26日） in 小値賀

### ★3月24日（木）★

いよいよ、小値賀報告会のため、佐世保港を出発。去年のように、朝の便が欠航にならなくてよかった。私は酔いやすいのでフェリーに乗り込み、先生のお話があった後、一番上まで直行。また、辛い船旅の始まりだ。ただ今回は去年のように、波はそれほど荒くはなく、睡眠もしっかりとって

きたのであまり酔わなかった。ただやっぱり・・・慣れない・・・。

到着後、みんなは論文集をお世話になった方々へ配りに行った。私は、大島にはフェリー便の関係上行けなかったので、車の運転に専念。夜は2年生も含めてリハーサル。私は一番目に発表ということでこのときも最初に発表した。相変わらず早口になってしまう。意識はしているのだが、私にとってはなかなか難しい。ゼミ生の前ですら緊張するのに・・・当日はどうなるのだろうか。報告会に関しては不安の要素ばかりだった。

### ★3月25日(金)★

今日は、朝ごはんをいただいた後、松永氏に送ってもらい、8時35分のはまゆうに乗って無事大島へ。はまゆうを降りると、そこには荷物を運び出している山本猛さんの姿があった。はじめに浜田作太郎さんのお宅へ伺った。論文集を渡すだけだからと電話をしていなかったのにも関わらず、お部屋に招いてくださった。また、浜田さんの家宝や私が浜田さんに出した手紙などを見せて、「大事にとってるよ」って言ってくださったときは、招待状を出して本当によかったと思った。また、浜田さんのところでお昼御飯までいただいた。本当にありがとうございました。

山本さんは農作業でお忙しい中、私のために時間を割いてくださった。論文集をお渡ししたときには大変喜んでいらっしやって、こっちまでうれしくなった。浜田さん、山本さんは報告会には来られないということでも残念ではあったが、私の調査に協力してくださったお二方をはじめ、大島の方々への感謝をこめて、しっかりとした報告をしようと改めて感じた。

会場で、最後のリハーサル、晩御飯を済ませた後、いよいよ報告会。とても緊張したが、ゆっくり原稿を読むことが出来たし、松村さんがタイムカードを見せているのも見えて、予想以上に落ちついて発表することが出来た。ただ原稿を読むのに必死で、来てくださっていた方々の表情までは分からなかったが、きっと悪くはなかったかな？と思う。報告会後は、肩

の荷が下りて、達成感でいっぱいだった。とにかく無事に終わってよかった。

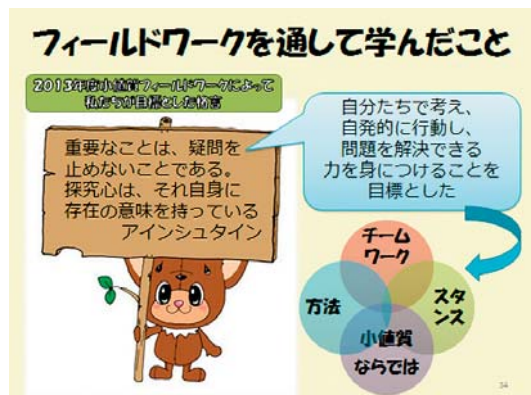
★ 3月26日（土）★

小値賀最終日。・・・というのに午前中は爆睡してしまっていた。ちょっと後悔。起きたらすぐ昼御飯、荷物の運び出しなどをしていたら、あっという間にフェリーの時間がきた。次小値賀に行くのはいつだろう。そもそも行くことがあるのかなあ・・・などなど考えながらフェリーから小値賀を眺めていた。また、機会があったら、調査とかではなく「観光」を目的に小値賀、そして大島に行こうと思う。

第2節 フィールドワークを通して学んだこと

この節では、学生がフィールドワークの実践から何を学んだのかについて、学生の振り返りを見ていきたい。ゼミでは、調査のテーマの設定と同時に、その学年の目標とする「格言」を設定し共有することとしている。2013年の学年の設定したアインシュタインの格言には、自分たちで考え、自発的に行動し、問題を解決できる力を身につけることを目標にした意味

図9. フィールドワークを通して学んだこと<sup>(7)</sup>



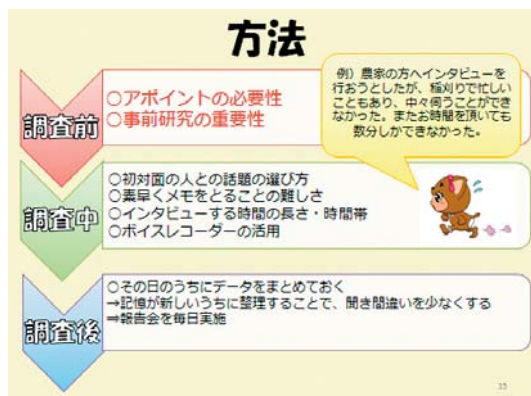
が込められている。なお、本節の内容は2013年12月11日(水)に開催された地域政策学科フィールドワーク報告会にて、発表した担当ゼミ生の報告を中心として分析・考察したものである。

## 1. 調査の方法とフィールドワークの心構え

学んだ一番目は「調査の方法」と「フィールドワークの心構え」についてである。フィールドワーク調査の方法として調査前・調査中・調査後それぞれの場面において重要なことがある。まず調査前においてはアポイントの必要性和事前研究の重要性である。次に調査中においては、素早くメモをとったりうまくボイスレコーダーを活用したりすること、またインタビューする時間の長さや時間帯も重要であること。調査期間がお盆の時期であったため、人によってはインタビュー調査が難しいケースもあったこと。調査後においてはその日のうちにデータをまとめること。調査期間中、毎晩、報告会という形で自らが調べた結果を報告したことで、記憶が新しいうちに整理することができ、聞き間違いを少なくすることができたことがあげられる。

「フィールドワークの心構え」はもちろん出発する前に必要な事柄であ

図10. 調査の方法

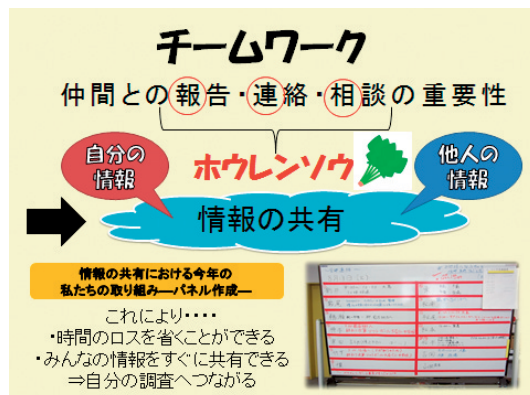


るが、改めて確認をしなければいけないのはフィールドワークを経験してからである。まず、第一に調査者はその土地の人にとって「よそ者」であり、ストレスを与える存在であり、自分たちが調査をさせてもらっている側ということを忘れてはいけないこと。第二に、インタビューの際に注意することは、「相手の目を見て、うなずきながら話を聞くこと」。それは相手の話がきちんと理解できているかを示すことで、相手も話しやすくなることがあげられる。最後に何より重要なことは、「相手の話を一方的に聞きすぎないこと」である。それは、インタビュー後、相手に「話さなきゃよかった」という思いを残してはいけないということである。そこで、ここから先は聞きたいけど聞かない、というバランス感覚と態度をどのようにとるかが重要となってくる。「聞きすぎてもいけない」ということを、常に「戒め」とする必要があることを学びの確認しておきたい。

## 2. チームワーク

二番目としては、チームワークについてである。フィールドワーク調査は1人ではなく13人で行ったため、仲間との報告・連絡・相談の「ホウレンソウ」が重要となった。自分の情報だけでなく他人の情報を共有し合う

図11. 調査におけるチームワークの重要性



ことで、チームワークや連帯感の形成、他人の情報から得たことで自らの研究を違う視点で見られることにもつながったこと。しかしながら、実際に調査を13人で行うにあたって、情報共有は難しいものがあった。そこで皆で情報共有ができるように、1人ずつの1日の予定を書き込むパネルを作成した。このパネル作成により、皆の情報をすぐ共有できたので、時間のロスを省くことにもつながったことが、重要な学びとしてあげられる。

### 3. 調査における「心がけ」と調査への「態度」

続いて、調査中におけるスタンス、つまり、心がけと態度についてである。調査中におけるスタンスとして、真摯な態度・笑顔の重要性・相手の状況を察する・積極性・感謝の気持ちの5つの事に心がけた。特に相手の状況を察するには、伝えたいことをしっかりまとめて簡潔に話す力や、調査内容の話だけでなく世間話のできる力も必要となってくるのが実感された。

図12. 調査の心がけと態度



### 4. 小値賀ならではの発見

最後に、フィールドワーク調査を円滑に行えた理由の一つとして小値賀ならではの特徴が挙げられる。小値賀町の方々は非常に温かく、親身になっ



図13. 「小値賀ならではの」の発見



て対応してくださったこと。それは小値賀の方々の他を受け入れる気質や、おもてなしなど、島民の方々の優しさが非常に伝わってきた。また、学生に時間を割いてくださること、山田ゼミの学生が夏に調査に訪れることを当たり前のように受け入れて下さっていること。これは山田ゼミの10年を超える調査の継続が築いた信頼関係のおかげであることにも気づかされた。

## おわりにー「教育としてのフィールドワーク」

小値賀町をゼミのフィールドワークの地として選択してから15年が経過した。学生と一緒に調査地として15年以上継続しているということに対して、「小値賀には何か特別なものがあるのですか?」という質問を受けることが多い。その質問への回答として、あえて、ここで挙げるならば、島民の愛郷心=「小値賀アイデンティティ」の強さであり、それは「人々のつながり」であり、現在も伝統的に残されている「地域共同体の存在」が生み出すものと言えるのではないだろうか。多くの島民が「自分たちの島は自分たちで守る」という気概を持っている。そうした島民の方々から受ける影響によって、ここ数年来の学生の卒業論文のテーマには、小値賀の

「互助関係」や「自力更生」、「島民ネットワーク」、「もてなし」「秋祭りの生み出すもの」、「離島の活性化」、「市町村合併」といったキーワードが浮かんでくる。それは、何より地域づくりの根幹に求められるものである。共同体の結束の強さは安心や安全、信頼を提供する。その一方で、それらの項目と同時に個人への拘束力や規制も伴い煩わしさも派生してくる。どのような場合にもその「両義性」が存在し、それらを含めて「その土地で生きること」の受容なのである。そのことを、毎年、フィールドで向き合い確認をしている。

小値賀をはじめとする地元での活動は、私も学生たちも地域貢献や活性化のために活動しているという意識ではなく、フィールドワークやさまざまな活動を通じて、むしろ地域でお世話になり勉強させてもらっているという感覚が強い。ただし、これは地域の抱える課題に知らん顔をするのではない。顔を突き合わせた関係の中で素直な意見交換もし、互いの理解を深め、共に行動するプロセスも共有していく。人類学の実践は「してあげるもの」でも「動員されるもの」でもなく、地域活性化や地域連携を目的とするものでもない。しかしながら、人のつながりが重要な力を発揮する「まちづくり」や「地域づくり」の場面で、現実の生活の実態を微細に捉え、社会の先端的な変化をもフィールドの脈絡から読み解くことのできる力を持ち、人のつながりの中でこそ成立しうる文化人類学的な知性を磨くことの意義と役割は小さくないと考えている。

フィールドワークの展開は

日常とは異なった生活の場に入り

その中での情報収集を体験することによって

人間関係や社会常識の重要性を知る場面をもたらす

社会や物事に興味を持つことや視点の重要性

さらには、自分のものの見方、考え方を深めることの重要性を気づかせてくれる<sup>(8)</sup>

大学教育の目的は知識の切り売りではない。学問を通して、生きていくうえで重要な、より本質的なことを教え、考えさせなければならない。フィールドワークは、教室、講義を離れ、現場において、こうした目的を達成する優れた教育でもある（斗鬼 2003：165）。しかしながら、何より重要なのは、「目的に添った体系的、綿密な実施計画」と「安全性」が求められ、指導教員はそれらに対する責任ある役割を自覚したうえで、実施し、彼らの成長をサポートすることが求められている。最後に担当した学生たちが見出した結論を紹介してまとめとしたい。

山田ゼミナールの大きな課題の一つとして、フィールドワークがあります。フィールドワークでは、どのようなことがあるか、どういった出会いがあるか分かりません。アクシデントもあれば想像もしていなかったような新たな発見もあります。事前準備もちろん大事ですが、現地での経験がとても重要であり、最後までめげない、あきらめないこと、求め続けることで必ず道は開けてくるのです。

（2013年 夏 小値賀のフィールドワークから）

### <謝辞>

最後に、これまで、フィールドワークにご協力いただいた早岐茶市振興会の皆様、出店者の皆様、また、学生のフィールドワークに長年に亘ってご協力くださった小値賀町民の皆様、関係者の方々にこの場をお借りして謝意を表したい。

なお、本文中の図の一部（図9～図13）は2013年度の3年生（2014年現在4年生）の作成によるものである。2013年度の地域政策学科のフィールドワーク報告会（2013.12.11 学内報告会）での発表内容を参考として使用している。3年生の実践の頑張りに感謝したい。



<写真3. 小値賀調査報告会風景 2013. 3. 23>

【引用・参考文献】

- ・合田濤・大塚和夫編『民族誌の現在』弘文堂 1996年
- ・東靖晋『境のコスモロジー-市・渚・峠』海鳥ブックス 1989年
- ・伊藤幹治／米山俊直編『文化人類学へのアプローチ』ミネルヴァ書房 1988年
- ・金子郁容『ボランティア-もう一つの情報社会』岩波新書 1992年
- ・佐藤郁哉『フィールドワーカー書を持って街へ出よう』新曜社 1992年
- ・佐藤郁哉『フィールドワークの技法-問いを育てる、仮説をきたえる』新曜社 2002年
- ・菅原和孝編『フィールドワークへの挑戦-実践人類学入門』世界思想社 2006年
- ・須藤健一編『フィールドワークを歩く-文系研究者の知識と経験』嵯峨野書院 1996年
- ・斗鬼正一『目からウロコの文化人類学入門-人間探検ガイドブック』ミネルヴァ書房 2003年
- ・波平恵美子・小田博志『質的調査の方法-いのちの<現場>を読みとく』春秋社 2010年
- ・日本文化人類学会監修 鏡味治也・関根康生・橋本和也・森山工編『フィールドワーカーズ・ハンドブック』世界思想社 2011年
- ・原尻英樹『フィールドワーク教育入門-コミュニケーション力の育成』玉川大学出版部 2006年
- ・松田素二・川田牧人編『エスノグラフィー・ガイドブック-現代世界を複眼でみる』嵯峨野書院 2002年
- ・箕浦康子編『フィールドワークの技法と実際-マイクロエスノグラフィー入門』ミネルヴァ書房 1999年

- ・山田千香子・吉居秀樹「長崎県立大学における地域学『長崎県北の歴史と文化－平戸・西海  
学』開講の経緯とその意義について」『長崎県立大学経済学部論集』第43巻第4号 2010年、  
pp177-208
- ・山中速人編『マルチメディアでフィールドワーク』有斐閣 2002年
- ・米山俊直・谷泰編『文化人類学を学ぶ』世界思想社 1991年

<注>

- (1) 山中速人編『マルチメディアでフィールドワーク』有斐閣 2002年 p. 3
- (2) それに対し、文化人類学者のフィールドワークは基本として、世界各地に出かけ、長期間  
現地に住み込み、現地の人と同じ食べ物を食べ、ともに行動することによって、あらゆる  
情報を収集する手法をとる。つまり、生活体験型調査、長期的な参与観察が必要とされる。
- (3) 「太平洋学術研究連絡委員会地域学研究専門委員会報告」  
[http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/17htm/17\\_43.html#1chiiiiki](http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/17htm/17_43.html#1chiiiiki) (閲覧日 2010/1/20)
- (4) 前掲資料。
- (5) 早岐商工振興会が出している説明書きによると「元来、早岐茶市は天正17年（1589年）  
頃。。。と記されているが、実のところ、何を根拠にその時代を計算したのかはつき  
りしていない。『肥前風土記』によれば『速来』一帯は松浦党の勢力下にあり、南北朝時  
代の一揆会盟書に「早岐氏」の名前が見える。400年前の時代は中世末期の戦乱も収まり、  
織田信長による「楽市楽座」の令が天正5年（1577年）に出ており、このあたりを基準に  
したのでらうともいわれている（東 1989：21）。
- (6) 人と人とのモノのやりとりによる関係性は市場交換がすべてではなく、どちらかという  
贈与と返礼が織りなす互酬の世界の広がりの方が大きい。早岐茶市でよく聞かれた言葉  
は「市は損得じゃなか」というものである。どこまでが経済的行為で、どこからそれ以外  
の行為になるのか判然としなないところがあるが、市場交換ではない直接的な「物々交換」  
から生み出されるものに気づかされ、本来の「絆」「つながり」の一端について、学生は  
触れることができたようである。
- (7) ここで紹介されている鹿は、いわゆる小値賀の「ゆるきやら」と呼ばれる地域活性化のご  
当地キャラクターの「ちかまる君」である。小値賀町住民によって誕生し、九州では人気  
のあるキャラクターの一つである。「はなちゃん」とのペアになっている。
- (8) 斗鬼正一『目からウロコの文化人類学入門－人間探検ガイドブック』ミネルヴァ書房 2003  
年 p. 165